

## 「幽玄」用例注釈（二）

——基俊までの用例と定家の用例——

武 田 元 治

前稿では「幽玄」の和歌関係の用例のうち、俊成の用例を採り上げた。本稿では俊成の師の基俊に至るまでの用例と、俊成の子の定家の用例を採り上げる。俊成の用例から見れば、その前にあって俊成に影響したと思われる用例と、その後について俊成の影響を受けたと思われる用例について、考察していくことになる。

本文や記述の仕方など、体裁を前稿の場合に合わせたが、漢文の部分には返り点を私見によって加えた。

### ○ 基俊までの用例

#### 1 『古今和歌集』真名序<sup>1</sup>

至<sup>レ</sup>如<sup>下</sup>難波津之什猷<sup>三</sup>天皇、富緒川之篇報<sup>中</sup>太子、或事関<sup>二</sup>神異<sup>一</sup>、或興入<sup>二</sup>幽玄<sup>一</sup>。但見<sup>二</sup>上古歌<sup>一</sup>、多存<sup>二</sup>古質之語<sup>一</sup>。

#### 【通釈】

「難波津にさくやこの花……」の歌を王仁<sup>わに</sup>が詠んで仁徳天皇に奉り、また「いかるがや富<sup>とみ</sup>のを川の……」の歌を行き倒れた者が詠んで聖徳太子にこたえたというが、これらの歌の場合は、事柄が不思議なことに関係していたり、興趣が幽玄に及んでいたりするところがある。しかし一般に上古の歌を見ると、多くの場合古風で飾り気のない言葉を用いて詠まれている。

【注】○難波津之什猷 「難波津にさくやこの花冬ごもり今は春べとさくやこの花」の歌。『古今集』仮名序に「おほささきのみかどをそへ奉れる歌」として出ている。同序の古注によれば、仁徳天皇が難波津で皇子の時代に、皇位継承に関して弟と譲りあったまま三年たったので、王仁<sup>わに</sup>が詠んで奉った歌という。○富緒川之篇 「いかるがや富<sup>とみ</sup>のを川の絶えばこそわが大君<sup>おほきみ</sup>のみ名をわすれめ」の歌。ただしこれは『拾遺集』（一三五二）に、飢えた者が聖徳太子の慈悲にこたえて詠んだ歌として収めた形による。これと大同小異の歌形で『上宮聖徳法王帝説』その他にも収められている。『日本霊異記』上巻第四話では、聖徳太子が路傍の乞食を仏性の化身であると知って厚遇し、乞食の死後墓を造らせたが、のち使いをやって様子を見させると、埋葬された人は見当たらず、「いかるがや富<sup>とみ</sup>のを川の絶えばこそわが大君<sup>おほきみ</sup>のみ名わすられめ」の歌が残されていたという。なお「富<sup>とみ</sup>のを川」は、今の奈良県生駒郡斑鳩町を南西に流れる富雄川<sup>とみお</sup>。○神異 不思議なこと。

【考察】「事関<sup>二</sup>神異<sup>一</sup>」と「興入<sup>二</sup>幽玄<sup>一</sup>」とは、難波津の歌と富緒川の歌との一首ずつに対応するのか、それとも二首を全体としてこのように言ったものであろうか。新日本古典文学大系『古今和歌集』の脚注に次のように記されるのは、後者の見方によると思われる。

難波津の歌を仁徳天皇に奉り、富緒川の歌を聖徳太子に報えたのなどは、事柄は靈妙であり、和歌は幽玄の趣があるという。

このような見方も可能であるとは思いますが、ただ「事関<sub>二</sub>神異<sub>一</sub>」を言葉どおりに受け取るならば、富緒川の歌が『日本霊異記』などに記された伝承によってそれにふさわしく思われる一方、難波津の歌をそれに結びつけるのは無理であろう。それで、「事関<sub>二</sub>神異<sub>一</sub>」は富緒川の歌にのみ対応し、そこから「興入<sub>二</sub>幽玄<sub>一</sub>」は難波津の歌に対応すると考える方が無理がないのではあるまいか。なお、こういう考え方は、すでに佐伯梅友氏が日本古典文学大系『古今和歌集』頭注に示されており、谷山茂氏もこれに賛成して、さらに詳論しておられる（『古今真名序の幽玄』―『幽玄』所収）。以上のようなことから、「興入<sub>二</sub>幽玄<sub>一</sub>」は、難波津の歌について言われたものと見たい。

では、難波津の歌のどのような点が「興入<sub>二</sub>幽玄<sub>一</sub>」とされるのか。難波津の歌は『古今集』仮名序で、「そへ歌」（詩の六義の一つ「風」）に相当するとされ、心を表面に表さず他の事にことよせて詠んだ歌の例に引かれ、「おほささきのみかどをそへ奉れる歌」として挙げられている。オホササキノミコトに皇位につくように勧める心を表面に表さず、春を迎えて木の花が咲く事にことよせて詠んだ、隠喩の歌と見られているのであろう。そうすると真名序で「興入<sub>二</sub>幽玄<sub>一</sub>」と評するのは、この歌のもつ興趣が、言葉の表面に現われていない奥深い内容の表現にかかわる点について言ったと見るのが、妥当ではないかと思われる。

要するにこの場合の「幽玄」は、難波津の歌の表現の特徴としての隠喩によって生じる奥深さを言うのに用いられたと見たい。

これに対して富緒川の歌は、伝承によれば詠まれた事情としての「事」は「神異」に属しているけれども、歌自体について見た場合「興」が「幽玄」にかかわるとは考えにくいと思う。

【備考】初めに掲げた真名序の引用文の内、終わりの「但見<sub>二</sub>上古歌<sub>一</sub>、多存<sub>二</sub>古質之語<sub>一</sub>」の部分は、当面の「幽玄」の用例を考える上では特に必要な部分ではないが、後の基俊の判詞の「幽玄」の用例に影響した形跡があると思われるので、ここで併せて引いておいた。

## 2 『和歌体十種』

### 高情体

ふゆながらそらより花のちりくるはくものあなたははるにやあるらむ

ゆきやらで山ちくらしつほととぎすいまひとこゑのきかまほしさにちりちらずきかまほしきをふるさとの花みてかへるひとあはなむ山たかみわれてもつきのみゆるかなひかりをわけてたれに見すらむうきくさのいけのおもてをかくさずはふたつぞみましあきのよの月

此体、詞雖<sub>二</sub>凡流<sub>一</sub>義入<sub>二</sub>幽玄<sub>一</sub>。諸歌之為<sub>二</sub>上科<sub>一</sub>也、莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>任<sub>二</sub>高情<sub>一</sub>。仍神妙、余情、器量皆以出<sub>二</sub>此流<sub>一</sub>。而只以<sub>二</sub>心匠之至妙<sub>一</sub>、難<sub>二</sub>強分<sub>二</sub>其境<sub>一</sub>。待<sub>二</sub>指南於来哲<sub>一</sub>而已。

### 【通釈】

### 高情体

冬でありながら空から花が――雪の花が散ってくるのは、雲の向こうはもう春なのであろうか。

行き過ぎかねて、山道で日を暮らしてしまった。時鳥のもう一声が、聞きたいばかりに。

花は散ったか、まだ残っているか、ぜひ聞きたいので、ふるさとの花を見て帰ってくる人があれば、出会ってほしいと思う。

山が高いので、月が割れて見える。月の光を分けてだれに見せているのであろう。

浮草が池の表面を隠していなければ、秋の夜の月を、空と池とに、二つ見ることができらるだろうに。

この高情体は、歌の詞は別に際立ったところがなくても、その心が幽玄の域に達した歌体である。いったい、さまざまな歌を通じて上等のものは、高情（世俗を離れた高潔な心）という点で一致している。そこで神妙体・余情体・器量体なども皆この高情体の系統に属する歌体ということになる。ただ、これらの歌体は心の



はたらきがきわめて優れているので、しいてその区別をつけることが困難なところがある。この区別については指示を後世の識者にゆだねたいと思う。

【注】○ふゆながらそらより花の……『古今集』三三〇、清原深養父の歌。詞書「雪のふりけるをよみける」。雪を花に見立て、花から春を思った作。○ゆきやらで山ぢくらしつ……『拾遺集』一〇六、源公忠の歌。詞書「北宮の装束の屏風に」。承平三年（九三三）八月二十七日、康子内親王装束屏風歌として作られた。○ちりちらずきかまほしきを……『拾遺集』四九、伊勢の歌。詞書「斎院屏風に、山みちゆく人ある所」。『拾遺抄』三〇の詞書は「斎院の屏風に春山道をゆく人のかた有る所に」。延喜十五年（九一五）閏二月二十五日、斎院恭子屏風歌かという（新日本古典文学大系『拾遺和歌集』）。○山たかみわれてもつきの……出典未詳。○うきくさのいけのおもてを……出典未詳。○詞雖凡流 歌の言葉は特に際立ったところがなくとも。このあたりの語句から影響を受けたと見られる『奈良花林院歌合』祝二番基俊判詞に「言凡流をへだてて、幽玄に入れり」とあることから、「詞雖凡流」は「詞隔凡流」の誤写かという推測もある。しかし「雖」のままで文意は通じる。○義入幽玄 歌の心は幽玄の域に達している。○上科 上等。「科」は品等。○高情 「俗を離れた高潔な心」（能勢朝次『幽玄論』）と解してよいであろう。岡崎義恵氏は白楽天の詩の「高情」の用例を調査し、「自然の美、文藝の雅情に没入した人の崇高な胸懷を中心としたもの」（「有心と幽玄」——『日本文芸学』所収）が多いことを指摘しておられる。○神妙、余情、器量 『和歌体十種』に挙げる十体の内の三種の歌体。「神妙体」は「神義妙体」と説明されており、超自然的で靈妙なことにもかかわる優れた歌体を言うらしい。「余情体」は「詞標二片、義籠二万端」と説明されており、言外に豊かな情趣を漂わせることを特色とする歌体と見られる。「器量体」は高情体や神妙体と区別しにくいという程度にしか説明されていないが、例歌などによって考えると、格調の高さや

大きさに特色のある歌体を言うようである。○心匠 心の中の工夫。○来哲 未来の賢人。

【考察】『和歌体十種』の「幽玄」の用例は、高情体を説明して「此体、詞雖凡流、義入幽玄」と述べたものである。「入幽玄」という言い方は、『古今集』真名序の用例を受けたものかと思われる。そしてここでは「詞」に対する「義」（歌の「詞」に対する「心」のことであろう）について言われ、『和歌体十種』で特に高い価値を認める高情体の特長を示す言葉として用いられているらしい点が注目される。

「高情体」とは、どのような歌体なのか。岡崎義恵氏は「有心と幽玄」（『日本文芸学』所収）の中で、平安朝の文学に影響するところの大きい白楽天の詩に「高情」の用例を探り、「自然の美、文藝の雅情に没入した人の崇高な胸懷を中心としたもの」が多いことを指摘する一方、「高情体」の例歌に即した考察を進め、次のように述べられた。

我々は以上五首の例歌に一貫したものを認め得る。其最も著しい特徴は自然への愛である。それは普通の愛といふ名を超えたものである。（中略）純粹で徹底的で忘我的な自然への没入である。高情體以外の例歌にも自然への愛の現はれてゐるものはあるが、五首共揃つてかくも脱落的な歸依没入の心を示した例は高情體にのみ見る所である。

高情体の例歌五首に関するこの岡崎氏の見方に対し、異なるところがあると思われる見方を、小沢正夫氏が『古代歌学の形成』に述べておられる。それによれば、五首の内、第二首と第三首は「表現は平明で、歌の心が幽玄の境に入った、代表的な高情体」と考えられるが、第一首は古今風の「理知的な趣向歌」、第四首と第五首も「理知の遊戲」に属する歌であるとされる。この小沢氏の見方に従えば、先の岡崎氏の考察は修正を要することになり、少なくとも五首の例歌の全部について「忘我的な自然への没入」を認めることはできなくなると思



われる。しかしこの五首は、理知的な趣向をもつ歌を含むとしても、俗界を離れて自然美の世界に心を遊ばせる態度に基づいて詠まれているとは言えるのではないか。そこで能勢朝次氏が『幽玄論』にまとめられたように、

高情といふ語は、俗を離れた高潔な心であり、自然の山水や詩歌の世界に遊神する雅情といふ意味をもつ語である

と考えてよいとすれば、五首の歌が「高情」の特長をもつ歌体の例に引かれていることが無理なく理解しうるかと思う。例えば第一首のふゆながらそらより花のちりくるはくものあなたははるにやあるらむ

は、同じ作者のこれと似た趣向による次の歌と比較すると、「高情」の特長をもつとされることがうなずけるのではないか。

あすはるたたむとしける日、となりの家のかたより風の雪をふきこしけるを見て、そのとなりへよみてつかはしける

冬ながら春の隣のちかければ中垣なかぎきよりぞ花はちりける（『古今集』一〇二一）

似た趣向をもつ歌であるが、後者が世俗の世界に即して詠まれているのに対して、前者は作者の心が俗界を離れたところに向けられていると見られ、その点で「高情」の歌とされたと考えられる。

高情体の歌をこのようにとらえると、その特長を示すと思われる「義入二幽玄一」は、歌の心が世俗の世界を離れて高雅な世界に至っていることを言ったと見てよいであろう。そしてこの場合「幽玄」は、俗界と高雅な世界との隔たりを意識した言葉で、本来の語義に基づいて右のような意味での奥深さを表すのに用いられているとも言えるであろう。

ただ同様に深さにかかわる「幽玄」でも、前の『古今集』真名序の場合には隠喩の歌について用いられていたと見られるなら、この高情体の説明の場合は精神的に高い段階に関して言われている点で、次元が異なるところがあると思う。

### 3 「天治元年『奈良花林院歌合』祝二番（判詞基俊）」

左勝

三郎公

君が代はあまの岩戸をいづるひのいくめぐりてふ数もしられず

右

牛公

みかさ山麓のさとはあめのしたふるふるに（永祿奈良歌合）きおもひもあらじとぞおもふ

左歌、言凡流をへだてて幽玄にいれり。まことに上科とすべし。

右歌、させる疑難なしといへども、いまだ俗類ぞろゝにいでず。仍以左為勝。

#### 【通釈】

左勝

三郎公

わが君のみ代は、天の岩戸あまから出た日が幾度ともなく空をめぐってやまない、それと同様、無限に続くものと存じます。

右

牛公

（春日の神のます）三笠山のふもとの里は、この天下で、これから心こころをなかにまじうると（永祿奈良歌合）もさびれることなく続くと思うのです。

左の歌は、表現がありきたりのものとは異なり、幽玄の域に達している。まことに上等の作と言うべきであろう。右の歌は、これという問題点はないけれども、なお世俗的な世界から離れるところがない。それで左の歌を勝とする。

【注】○三郎公 興福寺関係の仏門に入った年少者であろうが、未詳。○あまの岩戸をいづる日 天の岩戸から出る日。「天の岩戸」は、高天原にあったとされる岩窟の堅固な戸。俊頼の判詞に「天照御神のたてて入りたまひたりし戸なり」とあるように、ここでは天照大神の天の石屋戸の神話が思い寄せられているのであろう。○牛君 三郎君と同様、興福寺関係の仏門に入った年少者であろうが、未詳。○みかさ山麓のさと 「みかさ山」は、奈良の三笠山。山の前に春日神社があり、「神のますみかさの山」（保安二年『関白内大臣家歌合』山月三番左、「神のすむみかさの山」（同山月六番右）などとも歌われている。

るので、その「麓の里」は、春日の神の加護のある所として言ったものであろう。○あめのしたふるきおもひもあらじ 「あめのした」は、天下。「あめのした」「ふるき」は「みかさ山」の縁語（笠―雨―降る）。「ふるきおもひもあらじ」は、古くなりさびれたと思われることはあるまい、の意でもあろうか。ただし、俊頼判の『永縁奈良房歌合』（天理図書館蔵本）では、この部分は「ふるにおもひもあらじ」とある。これによれば「ふる」は「経る」で、年月を過ごす上での思いもあるまい、心安らかに暮らしているであろう、の意と解される。

【考察】この基俊の判詞は、左歌に対して、「言凡流をへだてて幽玄に入れり。まことに上科とすべし」と評したものである。この評語が『和歌体十種』の高情体の説明の「詞雖凡流義入幽玄。諸歌之為上科也、莫不任高情。」を受けて書かれていることは、主な語句が類似している点から明らかであろう。そこで、この基俊の評語は「高情」の語を含まないが「高情体」の意識を伴っており、左歌に俗を離れた高い心を認めていると考えてもよいのではなからうか。この点はまた、番えられた右歌を「いまだ俗類にいず」と評する点からも裏付けられるようで、左歌に俗を離れた心を認めるのと対照して右歌が世俗的な内容にとどまっているのを批判したと見られる。

ただし基俊の判詞は、ここで左歌を「高情」の歌と言っているわけではない。「言凡流をへだてて幽玄に入れり」と評しているので、重点の置きどころが「高情」から「幽玄」に移されているといった相違を考えてもよいと思う。そして、このような相違は、『和歌体十種』の「高情体」の例歌と、基俊が「幽玄」を主とする評語を用いた歌との、性質の違いに対応しているであろう。『和歌体十種』の「高情体」の例歌は、俗界を離れて自然美の世界に心を遊ばせるような性質が認められると思うが、基俊が「幽玄」を主とする評語を用いた歌は、それと異なる点があり、

君が代はあまの岩戸をいづる日のいくめぐりてふ数もしられず  
という祝の歌である。そして「君が代」の無限の長久について「数も

しられず」と歌う発想の作はこれ以前からあり、例えば

君が代のためしと見ゆる長浜にちくさの貝の数もしられず（長久元年『斎宮良子内親王貝合』）

の如くであるが、「あまの岩戸をいづる日」といった神話的連想を伴う表現をとるのは、この歌の特徴であろう。すなわちこの歌には、そういう神話にかかわるような幽遠な世界への志向が認められるとも言えるであろう。

基俊の評語「幽玄」は、そういう幽遠な世界と俗界との隔たりを意識して言われたものであろう。

【備考】この用例は『新編国歌大観』に未収録のため、『平安朝歌合大成』によった。

#### 4（長承三年『中宮亮顯輔家歌合』紅葉二番（判詞基俊））

左 新中納言（宗能）

見渡せばもみぢにけらし露霜に誰がすむ宿のつま梨の木ぞ

右 道經

紅の末つむ花にうすくこき露や紅葉の色をそむらん

左歌、詞雖擬古質之体、義似通幽玄之境。右歌、義実雖

無曲折、言泉已凡流也。仍以左為勝畢。

#### 【通釈】

左 新中納言（宗能）

見渡すと、露霜で紅葉したらしい木、——つま梨の木が見える。あれはだれが独り住む家のつま梨の木なのか。

右 道經

紅花に、色薄く、また色濃く置く露が、紅葉の色をさまざまに染めているのであろうか。

左の歌は、言葉は古風で飾り気のない姿をとって詠んでいるが、心は幽玄の境地に通じるところがあるように思われる。右の歌は、心は端的に詠まれているが、表現は陳腐なものになってい



る。それで左の歌を勝と判定した。

【注】○新中納言 藤原宗能。一〇八四—一七〇。○つま梨 梨の異名。「夫」または「妻」が「無し」の意をかける。『万葉集』に「もみち葉のにはひは繁し然れどもつま梨の木を手折りかざさむ」(二一九二)、「露霜の寒き夕の秋風にもみちにけらしつま梨の木は」(二一九三)の歌があり、宗能の左歌は二一九三番歌によって詠まれたと思われる。○道経 藤原道経。生没年未詳。○紅の末つむ花 紅花の異名。茎の末に咲く花を摘み取り紅を造ることによる名という。紅花は、キク科の一年草で、夏にアザミに似た紅黄色の頭花が咲く。「よそのみに見つつ恋ひなむ 紅の末つむ花の色に出でずとも」(『万葉集』一九九七)、「ひとしれず思へばくるし紅のすあつむ花の色に出でなむ」(『古今集』四九六)、「よそにのみ見てやは恋ひむ紅のすあつむ花の色に出でずは」(『拾遺集』六三二)などと詠まれる。○うすくき あるいは薄く、あるいは濃い。このような表現は「うすくくくくらぶの山のもみぢ葉は露もわかねど色ぞまされる」(天曆九年『内裏歌合』)以下、少なくない。○古質之体 古風で飾りけのない表現に特色のある歌体。『古今集』真名序に上古の歌について「多存古質之語」と言っているのを受けた言葉であろう。○言泉 泉がわき出るように言葉が出てくることを、本来意味する。ここでは言語表現のことを言ったのであろう。○以左為勝 群書類従本には「以右為勝」とあり、『新編国歌大観』もそのままの本文を収めるが、ここまでの判詞によれば「右」では文意が通らず「左」でなければならないので、『平安朝歌合大成』に従い本文を「左」に改めた。

【考察】この基俊の判詞は、左歌に対して、「詞雖擬古質之体、義似通幽玄之境」と評したものである。この評語が『古今集』真名序や『和歌体十種』の高情体の説明に見える「幽玄」関係の文言を受けて書かれていることは、語句の類似する点から明らかであろう。ただ「興入幽玄」(『古今集』真名序)や「義入幽玄」(『和歌体十種』)に比べて、「義似通幽玄之境」は、言い方を多少変えたよう

にも見えるが、これは「詞雖擬古質之体」と対句仕立てにした事情によるところが大きいかと思われる。そして「詞」の面での特色として「古質之体」をもち出したのは、『古今集』真名序の「古質之語」を受けたものであろう。

さて、基俊がこの批評を加えた左歌は、

見渡せばもみちにけらし露霜に誰がすむ宿のつま梨の木ぞ

の一首である。この歌はすでに指摘されているように、次の『万葉集』の作者未詳歌によって詠まれたと考えられる。

露霜の寒き夕の秋風にもみちにけらしつま梨の木は(二一九三)

左歌はこの万葉の古歌詞を採り入れて詠んだ点に一つの特色が認められそうである。その点を基俊は「詞雖擬古質之体」と評したのであろう。では「義似通幽玄之境」は、左歌のどのような点を評したのか。左歌について内容をうかがうと、露霜が置いて「つま梨の木」がもみじした風景とともに、そういう秋の気配に包まれた宿に独り住む人に寄せる心を詠んでいると思われる。「つま梨」は「夫無し」(あるいは「妻無し」)の心を含むであろうから、艶な気分も感じられるが、一首全体の雰囲気は、幽寂とでも言うべき世界に属するものであろうと思う。これは一首に歌われた秋の風景やその中でひそやかに暮らすらしい人の様子、また一首の簡古な表現などから、そのように思われるので、艶な気分もあるにしても、それは幽寂な世界の中に包まれているのではあるまいか。それで歌の心がそのような幽寂な世界に触れるかに思われる点を、「義似通幽玄之境」と基俊は評しているのではなかろうか。

この場合の「幽玄」は、そういう幽寂な世界と俗界との隔たりを意識して言われているように思う。

ところで、基俊が判詞に「幽玄」の評語を用いた歌は、前の『奈良花林院歌合』の場合とこの『中宮亮頭輔家歌合』の場合とで、性質に異なるところがあると考えられる。もとより歌題も前者は「祝」、後者は「紅葉」という違いがあるが、歌の表現する世界から見ると、前



者は幽遠な世界を、後者は幽寂な世界を志向するところがあるとも言えるであろう。しかし、そのような相違する面がある一方で、作者の心が世俗の世界から離れた深いものに向けられている点では、これらの歌は共通性が認められる。基俊はその点について「幽玄」の評語を用いたのであろう。

この基俊の「幽玄」観は、俊成に受け継がれ、さらに発展していくことになったと思う。

## ○ 定家の用例

### 1 「文治五年『宮河歌合』一番」

左特

玉津島海人

万代を山田のはらのあや杉に風しきたててこゑよばふなり

右

三輪山老翁

流れいでてみ跡たれますみづがきは宮河よりやわたらひのしめ

左右歌、義隔「凡俗」、興入「幽玄」。聞「杉上之風声」、摸「柿下之露詞」、見「宮河之流」、探「蒼海之底」。短慮易「迷」、浅才難「及者」歟。仍先為「持」。

### 【通釈】

左特

玉津島海人

限りなく続くみ代を、山田の原のあや杉に風がしきりに吹きわた  
り、声をあげて呼び続けている。

右

三輪山老翁

水源から流れ出た水が、宮川を経てここに続くように、源も遠く大  
日如来の示現されたみ社の垣は、この度会の神域の印である。

左右の歌は、心が世俗一般のものと異なり、興趣が幽玄に及んで  
いる。（左の歌は）杉の林の上を渡る風の音を聞く時、柿本人麻呂  
の歌詞に見まがう詠み方をし、（右の歌は）宮河の流れを見る  
時、大海の底にも比すべき深いものを歌っている。判者の浅い考

えでは優劣の判断がつけられず、乏しい才能では理解の届きかねる作かと思う。そのため、一応持と判定しておく。

【注】○玉津島海人 『宮河歌合』は西行の自歌合であるが、これは左歌の仮の作者名。「玉津島」は和歌浦の島で、玉津島神社があり、祭神に和歌の神として衣通姫が加えられていた。○山田のはら 伊勢神宮外宮付近の原。○あや杉 綾杉。『拾遺集』に「おひしげれ平野の原のあや杉よこき紫にたちかさぬべく」（五九二、『梁塵秘抄』五一○では第五句「たがはるべくも」の歌が見える。「榎」の一種、葉は杉に似て細く裏も白い」（日本古典文学大系『梁塵秘抄』注）のように説明されることが多い。ただし西行の歌には「きかずともここをせにせむ時鳥山田の原のすぎのむら立ち」（『残集』、『西行上人集』、『御裳濯河歌合』十五番、『新古今集』二二七）のような作もあるから、ここも神域にふさわしい杉木立といったとらえ方が主となっているであろう。○風しきたてて 風がしきりに吹きわたって、の意か。「しき」は、しきりにの意の接頭語。○三輪山老翁 左歌の「玉津島海人」に対応する右歌の仮の作者名。「三輪山」は大和にあり、山全体がふもとの大神神社の神体とされる。『古今集』の「わがいはは三輪の山も」とこひしくはとぶらひきませ杉たてるかと」（九八二）は、よみ人しらずの歌であるが、三輪明神の作とする言い伝えがあり、『奥義抄』や『古来風体抄』等にもその事を記している。○流れいでて 遠い源から流れ出で。次の「み跡たれます」に続き、伊勢神宮の祭神の源がはるかなことを言う一方、「宮河」の水が遠い水源から流れ出たことにも触れた表現であろう。○み跡たれます 大日如来が神として示現される。「跡」を「垂る」は、「垂跡」の訓読で、本地である仏・菩薩が衆生を救うためにかりに神などになって現世に現われること。伊勢神宮で祭神とする天照大神を大日如来の垂跡と見る見方は古くからあり、西行もこの見方をとったことは、『千載集』一二七八番の西行の歌の詞書に「大神宮の御山をば神ち山と申す。大日如来御垂跡をおもひてよみ侍りける」とあることなどから知られる。ただ伊勢神宮の内宮

の祭神が天照大神であるのに対して、外宮の祭神は豊受大神であるが、共に大日如來の垂跡とする見方もあり、『沙石集』(「大神宮御事」)には「内宮外宮ハ兩部ノ大日トコソ習伝ヘテ侍ベレ」と言い、「内宮ハ胎藏ノ大日」「外宮ハ金剛界ノ大日」とする説を記している。○みづがき 瑞垣。神社などの周囲に設けた垣根。「流れいでて」「宮河」に関連して「水」の意も含めた表現であろう。○宮河よりやわたらひのしめ「宮河」(宮川)は伊勢の国の南西部大台が原山に源を発し、東流して度会郡に入り、外宮付近を流れて伊勢湾に注ぐ川。「わたらひ」は伊勢の国度会郡。古来伊勢神宮の神郡(神領とされる郡)であった。「しめ」は、神の宿る地域(または特定の人の領有する地域)を示す標識。動詞「占む」の連用形の名詞化したもの。注連縄の意にも用いられた。ただ「宮河よりやわたらひのしめ」をどう解釈するかは難しい問題である。渡部保氏『西行山家集全注解』では「宮川からわたらい(外京より内京まで)にかけわたしたしめなわなのである。(この解末だし)」とされる。私見では、「……みづがきは」を直接受けるのが「わたらひのしめ」「しめ」は神域を示す標識で、これを主想とする一方、重ね合わせた副想として、水が水源から「流れいでて」、それが「宮河より」「わたらひ」に「わたる」(続き連なる)かと思われることを歌ったと見ては、いかがであろう。試みにこの私解による現代語訳を「通釈」に記す。○摸柿下之露詞 柿本人麻呂の歌詞に見まがうばかりの歌い方を示し、というほどの意味か。「柿下」は修辭上「杉上」に対するが、柿本人麻呂を指す。これは歌聖として人麻呂を挙げたのであろう。(ただし、『万葉集』一九九番の人麻呂の長歌に、伊勢神宮から神風が吹いたことが歌われているので、それが意識されているかもしれない。)○探蒼海之底 大海の底にも比すべき深いものを歌っている、というほどの意味であろう。ただし『新編国歌大観』は中大図書館本によって「探」とするが、「深」の本文が一般。「深」なら、大海の底よりも深いものを歌っている意になる。

【考察】定家が和歌の批評に「幽玄」の話を用いた例は五例が知られ

るが、これはその中で最も早い時期のものに属する。『宮河歌合』の判詞を定家が完成したのは文治五年(一一八九年)と見られるので、それ以前に成立していた『御裳濯河歌合』の俊成の判詞に至るまでの「幽玄」の諸用例を定家は理解した上で、「幽玄」の評語を用いたことが考えられる。

定家はここで左右の歌について、

義隔凡俗、興入幽玄。

と評している。これと似た語句の見られる「幽玄」関係の評語の先例を求めると、次のようなものを拾うことができる。

興入幽玄。(『古今集』真名序)

詞雖凡流、義入幽玄。(『和歌体十種』)

言凡流をへだてて幽玄にいれり。(『奈良花林院歌合』基俊判詞)

風体は幽玄、詞義非凡俗。(『中宮亮重家朝臣家歌合』俊成判詞)

詞)

詞存古風、興入幽玄。(『三井寺新羅社歌合』俊成判詞)

これらの「幽玄」関係の評語は、評者により用語上の多少の変化を示しているが、先人の用例に類似した語句を用いる点で、先例を継承するところが認められる。そしてこの定家の評語の場合は、特に俊成の二つの用例の各の終わりの部分、「義非凡俗」と「興入幽玄」を併せたような形の評語を用いている。それで定家は、少なくとも判詞の文言の上では俊成の「幽玄」を忠実に継承しているらしく思われる。

では、定家の「幽玄」と評した歌は、どのような性質の歌であったか。それは俊成の「幽玄」と評した歌と共通性をもつかどうか。定家がここで「幽玄」を含む評語を用いた歌は、左右の両方にわたっている。

(左) 万代を山田のはらのあや杉に風しきたててこゑよばふなり  
(右) 流れいでてみ跡たれますみづがきは宮河よりやわたらひの

しめ



この二首の歌は、西行の伊勢の神への深い賛仰の心から詠まれたものと思われ、左歌は、外宮付近の杉の木立を吹く風が神の加護による「万代」の榮えを声高らかに告げていると詠み、右歌は、源も遠く大日如來の示現した伊勢の神の鎮座する所として度会の神域を採り上げている。二首ともに俗界を離れた幽遠な世界を志向するものとも言えそうで、それが「義隔凡俗」とも「興入幽玄」とも評せられているのである。そして基俊・俊成が「幽玄」の評語を用いた歌にも、そういう幽遠な世男を志向するものが含まれていたことは、それぞれの考察で触れたところである。

## 2 「建仁二・三年頃『千五百番歌合』七百五十一番」

左 女房  
秋のむしのでだまもゆらにおるはたをたれきて見よと野辺のゆふぐれ

右 女房  
月はこれあはれを人につくさせてにしへつひにはさそふなりけり  
左、秋虫仮機婦札札之声、晩野感行人悠悠之望。詞雖為塞北秋雁之行、心深於江南春水之色。其義偏慣于上世、其体又超乎中古。

右、寄瞻望於秋月、凝観念於西天許也。幽玄之詞、雖頗異、他、勝負之思、更難及左者歟。

### 【通釈】

左 女房  
機織り女が手玉を鳴らして機を織る、その音さながらに秋の虫が鳴き、野に色どりを加えているが、野辺の夕暮れに、だれに來て見よというのであろう。

右 女房  
月というものは、あわれみの限りを人に味わわせて、そのあけく西方へ人の心を誘っていくことである。

左の歌は、秋の虫の声が、機織り女の機を織る音のようで、夕暮の野原が、旅人の心に愁いを帯びた眺めをもたらす、——そういう情景を詠んでいる。歌の言葉は北方辺土の空を飛ぶ秋の雁の列を思わせる表現であるけれども、歌の内容は江南の春の水の色よりも深く、艶な美しさを秘めている。その心はひとえに上代の歌心にならって高いものがあり、その歌の姿も中古の歌の姿よりも勝っている。

右の歌は、秋の月をはるかに仰いで、その沈んでいく西空のわたの浄土に思いをこらすことを詠んでいる。その幽玄を感じさせる表現は、すこぶる異色のものであるが、勝負を判定するとなると、左の歌には匹敵がたいかと思う。

【注】○女房 ここでは後鳥羽院の仮の作者名。○てだまもゆらにおるはた 手首の飾り玉を鳴らしながら織る機（織物）。「ゆら」は玉の触れあって鳴る音を表す語。『万葉集』に「足玉も手玉もゆらに織るはたを君がみけしに縫ひもあへむかも」（二〇六九）の歌が見える。なお、この後鳥羽院の歌の場合について、谷山茂氏は「秋の虫が機を織るような声で鳴きながら、野べの草を紅葉させていると見立てた。」（『日本古典文学大系『歌合集』』と注される。○たれきて見よと野辺のゆふぐれ 上記谷山茂氏注では「誰に來て見よというのかしらないが、野べの夕ぐれは（哀が深い）」と解し、参考歌として「高円の尾上の宮の秋萩を誰きて見よと松虫の声」（『秋篠月清集』一一二九）を挙げられる。この解釈は妥当と思うが、なお付言すれば「きてみよ」は「着てみよ」の意も含まれているかもしれない。この点は『後撰集』の伊勢の歌「あをやぎの糸よりはへて織るはたをいづれの山の鶯かきる」（五八）などから考えられるかと思う。○釈阿 藤原俊成の法名。○にしへつひにはさそふ 最後には西方へ人の心を誘う。「西」は、月の沈む方向、また極楽浄土のある方向として言う。○札札之声 機を織る音。○悠悠之望 「うれいを含んだがめ」（谷山茂氏『歌合集』）と解するのが妥当であろう。○塞北秋雁之行 北方辺土の空



を飛ぶ秋の雁の列。ただこの語句は左歌の「詞」の特色を示すものとして言われたと見られるが、どんな特色を示しているのかは、問題があると思う。この点について、谷山茂氏は「辺境のとりでの北に飛ぶ雁をおぼつかないものたえとして、詞つづきがややおぼつかない、という意か。」(『歌合集』)と考えられた。しかしこの歌の詞続きがおぼつかないとは見ることは疑問が残るし、後鳥羽院の歌に対する定家の批評としてもいかがであらうか。歌と判詞の前後の文章とから考えてみると、字余りの句で始まる地味で重厚な言葉続き、少なくとも甘美さとは程遠い言葉続きを言ったものではなからうか。○江南 楊子江の南の地域。○上世 上代。『万葉集』の時代。定家の父、俊成は『古来風体抄』で和歌史を三つの時期に分けて、「かみ、万葉集よりはじめて、中古、古今集・後撰・拾遺、しも、後拾遺よりこなたさまでの歌」とし、「かみ」については別のところで「上古」とも言っている。そして作歌の実践の上では、「万葉集は時世久しくへだたり移りて、歌の姿ことば、うちまかせてまなびがたかるべし。古今の歌こそは、歌の本体とあふぎ信ずべきものなれば」(『古来風体抄』下巻)という立場をとったが、『万葉集』についてはその「心」に高い価値を認めて、「猶中古の歌は万葉の心におよびがたかるべし」(『千五百番歌合』百六十七番判詞)と言っている。こういう俊成の見方は定家に継承されたと思われる。○寄 瞻望於秋月 秋の月をはるかに仰ぎ見て。『和漢朗詠集』に「只寄 瞻望於秋月」(七八三)の句がある。○擬 観念於西天 西方の空を見て、そのかなたにある浄土に思いをこらす。「観念」は仏教語で、仏・浄土などに心を集中して観察思念すること。

【考察】『千五百番歌合』の定家の判詞には、「幽玄」の評語が、この用例と次の用例との二例にわたって用いられているが、いずれも俊成の歌に対する評語である。これらの用例の場合、定家は特に俊成の歌に「幽玄」と言うのにふさわしい特色を見いだしていることが、まず注目される。なお、定家が「幽玄」と評した俊成の二首の歌に対す

る勝負の判定については、この用例では負、次の用例では勝と見られるが、この点は定家も「幽玄」を最高理念としていなかったことを示すけれども、それ以外に例えば定家が俊成の二首の歌に価値の差をつけていたなどということは、考えられないと思う。これは番えられた歌の作者が、この用例では後鳥羽院、次の用例では顕昭であり、特に後鳥羽院の歌を負とはしにくいという特殊な事情が考えられるからである。

ただ定家の判詞は、ここでは「詞」に関して「幽玄」と評し、次の用例では「心」に関して「幽玄」と評している。この相違は歌の性質の相違などによるものかどうか、一応検討しておく必要があるであらう。

ここでは右の俊成の歌を「幽玄之詞、雖頗異他」と評している。歌の「詞」の方面に関して「幽玄」と評しているので、この点は従来の「幽玄」の用例に比べて多少特殊な点と言いうるかもしれない。俊成の判詞の「幽玄」の用例では「風体」「体」「姿」「様」など歌全体の姿に関して評するか、「心」「興」など歌の心に関して評するのが一般である。ただ、俊成が「詞」だけに関して「幽玄」と評した例は残されていないが、「心詞幽玄の風体なり」と評した例(『慈鎮和尚自歌合』聖真子九番)はあるから、例のない用い方を定家がしたとも言えない。さて俊成作の右歌、

月はこれあはれを人につくさせてにしへつひにはさそふなりけり  
この歌は、月が「あはれを人につくさせ」たあげく、遠く西方浄土へ人の心を誘うと歌っている。幽遠な世界への志向が認められると思う。ただし、幽遠な世界へ向ける心を直接歌うのではなく、それを見据える立場から詠んでいる。そして、そういう観想の世界を伝えるに当たって、無用の修辭を用いず、独自の淡泊な表現によっているのも、特徴的な点であらう。このような世俗を離れた観想的な世界を端的に伝える言葉続きに定家は注目して「幽玄之詞」と評したのではあるまいか。



俊成が「心」とともに「詞」に関しても「幽玄」の風体と評した歌は、

冬がれの梢にあたる山風のまたふくたびは雪のあまぎる（『慈鎮和尚自歌合』聖真子九番左）

であった。俗界を離れた心の世界を、淡泊で端的な言葉続きで表現している点で、これらの歌には共通性が認められるのではないか。俊成作の右歌も、多分「幽玄之心詞」と評してもよかったであろうと思うが、定家はここでは心を表す「詞」の特色に注目し、「幽玄」な世界を伝える「詞」という意味で「幽玄之詞」と言っているのである。

### 3 「建仁二・三年頃『千五百番歌合』七百八十番」

左 頭 昭

なきまざるおのがこゑにやきりぎりすふけゆくよはのほどをしるらん

右 釈 阿

ふるさとにひとりも月を見つるかなをばすてやまをなにおもひけん  
左、暗蕪之韻、以三己音之漸増、知三夜漏之方闌。推察之思、頗似無詮。

右、玄兔之影、極三旧里之閑望、編三名所之遠情。心尤幽玄、足三賞翫者歟。

#### 【通釈】

左 頭 昭

こおろぎは、夜のふけるにつれて鳴きしきる、その自らの声によって、どれほど夜がふけわたったかを知るのであろうか。

右 釈 阿

ふるさとで、ひとり月を眺め、身にしみる思いがした。姨捨山の月を、どうしてとりわけ優れたものと思ったのであろうか。

左の歌、夜のこおろぎの声を詠んだ歌は、自らの声が次第に高ま

ることで、こおろぎが夜のふけるのを知るのであろう、と詠んでいる。このような推量は、すこぶる無意味な趣向のように思う。右の歌、月かげを詠んだ歌は、ふるさとであくまで月を心静かに眺め、（姨捨山という）月の名所にこだわって遠く思いやるのを狭い見方とする。その心ははなはだ幽玄で、鑑賞するに足る作かと思う。

【注】○頭昭 六条家の歌人。藤原頭輔の猶子。一一三〇頃—一二〇九頃。○きりぎりす こおろぎ。○ふるさと 以前から住んでいた里とか、以前住んでいた里とか、以前からなじみの里とか、昔都などのあった所とかを指して用いられるが、その区別のつけにくい場合もある。また、古くなりさびれた所という気持ちを含めて歌われる場合が多いようである。○をばすてやま 姨捨山。月の名所。今の長野県戸倉町と上山田町の境にある冠着山のことと言われる。『古今集』に「わが心なぐさめかねつ更科やをばすて山にてる月を見て」（八七八、よみ人しらず）の歌があり、『大和物語』では、更科に住む男が妻に責められて伯母を山上に捨てたが、この歌を詠んで連れもどし、その後姨捨山の名がついたという話を伝える。（百五十六段）○暗蕪 暗夜に鳴くこおろぎ。○夜漏 夜の時刻。本来「漏」は漏刻で、「夜漏」は夜の時刻をはかる水時計を言い、そこから転じた意味。○玄兔 月の異称。○極三旧里之閑望、編三名所之遠情 「旧里ノ閑望ヲ極メ、名所ノ遠情ヲ編シトス」と訓じ、「通釈」のように解したい。「閑望」は、ゆったりと望むこと。「遠情」は、遠く思いやる心。『新編国歌大観』（第五巻）では、「極旧里之閑、望編名所之遠情」と読点がつけられている。

【考察】この用例は、前の用例と同じく、『千五百番歌合』で定家が俊成の歌に対して「幽玄」の評語を用いたものである。ただし、前の用例では「幽玄之詞」と言い、詞に関して「幽玄」を採り上げていたが、ここでは「心尤幽玄」と心について評している。

この場合の俊成の右歌は、

ふるさとにひとりも月を見つるかなをばすてやまをなにおもひける

である。さびれたふるさとで一人月を見た時の感慨を主とし、それが名所の月に劣らず感深いものに思われたことを歌った作かと思う。前の用例の俊成の歌に比べて主情性が濃いと思われるが、その世俗を離れた思いの深さに定家は注目して「心尤幽玄」と評したものである。なお、ここで「幽玄」を「心」について言ったのは、番えられた顯昭の歌を心の面で批判したのに対応させたということもあるかと思う。

ところで、俊成の月の歌でも、前の用例の、

月はこれあはれを人につくさせて西へつひにはさそふなりけり  
の歌に幽遠な世界への志向が認められたのと比べると、この歌は幽寂な世界への志向がうかがわれるようである。基俊が「幽玄」と評した歌や、その後俊成が初期に「幽玄」と評した歌に、幽遠な世界への志向の認められるものと、幽寂な世界への志向の認められるものとがあることは、別に考えておいたところである。定家の「幽玄」と評した歌にも、同様の二つの系統のものが見いだされるのは、基俊や俊成の「幽玄」の伝統を定家が継承していることを示すと思われる。

#### 4 「承元三年『近代秀歌』」

(俊頼朝臣)

うづらなくまのの入江のはま風に尾花なみよる秋のゆふ暮

ふるさととは散るもみぢ葉にうづもれて軒のしのぶに秋風ぞ吹く

これは幽玄におもかげかすかにさびしきさまなり。

【通釈】

(俊頼朝臣)

うづらが鳴く、真野の入江の浜風を受けて、すすきの穂が、波の寄せるようになびく、秋の夕暮れよ。

ふるさと(昔住んでいた里)は、散るもみぢ葉におおわれて、(昔

をしのぶすがの)軒のしのぶ草に、秋風が吹いている。

この二首は、幽玄で、イメージがかすかに浮かんできて、寂しさが感じられる、そんな歌の姿である。

【注】○うづらなくまの入江の……『金葉集』二二九、『散木奇歌集』四一四、源俊頼の歌。『金葉集』詞書に「堀河院御時、御前にて各題をさぐりて歌つかうまつりけるに、すすきをとりてつかまつれる。『散木奇歌集』の詞書も大同小異。『鶉』は、キジ科の鳥で、『八雲御抄』(巻三)に「秋の物也」とあるように和歌では秋季の鳥とされた。『真野の入江』は、近江の歌枕で、今の滋賀県大津市真野の真野川が琵琶湖に入る河口部にあった入江という。「尾花」は、すすきの花穂。「波寄る」は、波がうち寄せることであるが、『後拾遺集』のころから植物の穂のなびく様子の比喻に用いられた。「秋の田になみよるいねは山川の水ひきうゑしさなへなりけり」(『後拾遺集』三七〇、相模)○ふるさととは散るもみぢ葉に……『散木奇歌集』五六〇、『新古今集』五三三、源俊頼の歌。『散木奇歌集』詞書「障子の絵に、あれたる山ざとに紅葉ひまなくちりたる所をよめる。『新古今集』の詞書も大同小異。『軒のしのぶ』は、軒忍で、シダ類ウラボシ科の常緑多年草。和歌では「しのぶ」「しのぶ草」は、昔をしのぶよすがとなるものとして詠まれることが多い。○おもかげ 歌論用語としては、ほのかに眼前に浮かぶイメージを言う。主に風物詠に関して、風物の具体的形象が眼前に思い浮かべられるような表現効果を認めた場合の評語として用いられる。俊成が愛用した語で、定家もこれを継承したと見られる。(小著『中世歌論をめぐる研究』所収「中世歌論における『おもかげ』について」に、用例を挙げ、私見を記した。)

【考察】『近代秀歌』の原形本(遺送本)系統の本には、このような「幽玄」の語を含む評語が見られる。こういう評語は秀歌例の中で俊頼の歌に対して集中的に加えられており、この点は疑問と言えれば疑問であるが、定家の評語であることを否定するほどの理由は特にないの



で、ここで採り上げておきたい。

この評語は、俊頼の二首の歌の「さま」の特徴を「幽玄」をはじめ三つの点について挙げている。この場合「幽玄に」と「おもかげかすかに」と「さびしき」の三者の關係は必ずしも明らかではない。けれども俊頼の二首の歌体の特徴を示す上で三者は互いに補完的な役割を担い、それぞれ多少異なる面から特徴をとらえようとしたと思われる一方、その並列的な挙げ方から見ても、ある程度相互に関連している可能性が考えられる。これは批評の対象とした歌に、秋の寂しい情景が眼前に思い浮かべられるところがあるとすれば、そこからも考えうることかと思う。

この場合の「幽玄」は、多分「おもかげ」が「かすかに」思い浮かべられることと無縁ではないであろう。俊成の晩年の「幽玄」に、歌の表現する「おもかげ」の世界の、いわば世俗の世界からの距離について言ったと見られる用例のあることは、別に考えておいたが、この場合の「幽玄」に関しても同様のことが考えられそうである。しかし俊成の晩年の「幽玄」が「艶」な「おもかげ」と結びつけて捉えられていたと思われるのと違って、この場合の「幽玄」が「さびしき」色調を帯びた「おもかげ」にかかわるものであることは、俊頼の二首の歌について見れば明らかであろう。そういう点ではこの場合の「幽玄」は、幽寂な世界に関する「幽玄」の系統に立つものとも言えると思う。

【備考】『近代秀歌』は『新編国歌大観』では歌のみを収めるため、この用例は『日本歌学大系』（第三巻）によった。

#### 5 「貞永元年『名所月歌合』二十四番」

左

月かげはあきの夜ながら（新編国歌大系）ながくすみのえのいく千とせにかあひおひのまつ

右勝

高倉

さとはあれてふしみのあきを来てとへば月こそやどれあさぢふの露

住江月、又雖「募神社之威」、伏見秋、殊入「幽玄之境」。仍為「勝」。

#### 【通釈】

左

権中納言定家

月の光は秋の夜に長く澄みわたり、住の江の相生の松は幾千年の歳月に会うことであろうか。

右

高倉

伏見の里は荒れて人影もなく、秋に訪ねてみると、月光ばかりが浅茅が原の露に宿っていた。

住の江の月の歌は、これも神社の威光を求めた作であるが、伏見の秋の歌は、とりわけ幽玄の境地に達した秀歌である。それで、この（右の）歌を勝とする。

【注】○権中納言定家 藤原定家。一一六二—一二四一。定家は貞永元年（一二三二）正月に権中納言に任じられた。七十一歳。○秋の夜ながくすみのえの 「ながく」は、永青文庫本を底本とする『新編国歌大観』では「ながら」とあり、意味が通じない。ここでは群書類従本等の形によった。「すみのえ」は「澄み」を「住の江」に掛ける。「住の江」は摂津の国の歌枕で、今の大阪市住吉区のあたり。住吉神社がある。○あひおひのまつ 「会ひ」を「相生」に掛ける。「相生の松」は一つの根から二本の幹の出た松。○高倉 八条院高倉。女流歌人。生没年は不明であるが、一二三七年に六十歳ほどで生存したと見られる。○ふしみ 伏見。歌枕として、大和の伏見（菅原の伏見、今の奈良市の西部のあたり）と、山城の伏見（今の京都市伏見区のあたり）とがある。荒れた伏見の里というイメージが結びつくのは、まず「いざここにわが世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし」（『古今集』九八一、よみ人しらず）や、「菅原や伏見の里のあれしよりかよひし人の跡もたえにき」（『後撰集』一〇二四、よみ人しらず）等と歌われた、大和の菅原の伏見の里であろう。ただ歌枕としては山城の伏見の里も大和の伏見の里と区別なく扱われているようである。○あさぢふ 浅茅生。丈の低いチガヤの生えた所、またチガヤがまばらに

生えた所。チガヤはイネ科の多年草で、荒れ地に群生する。○又雖「募神社之威」「又」と言ったのは、定家は『名所月歌合』で、二番左歌に伊勢神宮にかかわる御裳濯川の月を詠み、十三番左歌に春日神社にかかわる春日山の月を詠んでいるためであらう。「神社」はここでは住吉神社。「募」は、まねく意味で、「募神社之威」は、『名所月歌合』十三番の定家の判詞に見える「仮神社」とほぼ同様の意と見てよいと思う。

【考察】この用例は、定家が高倉の歌に対して「殊入幽玄之境」と評したものである。「幽玄之境」を評語に用いた先例を求めると、基俊・俊成の次のような用例がある。

義似「通幽玄之境」。(長承三年『中宮亮顯輔家歌合』紅葉二番、基俊判詞)

すがた、已に入「幽玄之境」。(嘉応二年『住吉社歌合』旅宿時雨二十五番、俊成判詞)

これらの基俊・俊成の「幽玄之境」の評語を用いた歌には、それぞれ幽寂な境地を志向する特徴があることは、別に注目しておいた。ここで定家が「殊入幽玄之境」と評した高倉の歌を見ると、荒れた伏見の里を秋に訪れると浅茅生の露に月影のみが宿ると歌っており、やはり幽寂の境地に心を向けた作と言えるであらう。

以上、「幽玄」の評語を用いた定家の用例を見てきたが、いずれも世俗を離れて幽遠あるいは幽寂な世界に心を向けたところのある歌に対して「幽玄」と評している。こういう点では基俊から俊成に受け継がれた幽玄観が定家にもまた継承されていると言えるであらう。

しかし一方で、俊成の晩年の「幽玄」の用例に読みとられる、「艶」な「おもかげ」の世界を世俗の世界からの距離に即して「幽玄」としてとらえる見方は、定家に継承された形跡が認められない。

その理由について推測してみると、定家の判詞による批評の出発点は『宮河歌合』で、定家が「幽玄」の評語を用いたのもここに始まっ

ているが、この時期までは俊成も「幽玄」の評語を主として基俊から継承したところに従って用いていたことが、まず考えられると思う。『宮河歌合』と姉妹関係にある『御裳濯河歌合』の判詞を書いたところまでの俊成は、艶な色調をもつ歌を「幽玄」と評した場合もあるけれども、なお艶な面影を幽玄と結びつけて明確に意識するには至っていないと思う。もっとも、この後俊成が新しい幽玄観を形成していくのに対して、定家がその影響を受けなかったのはなぜかという疑問は残るが、定家が批評活動の初期に俊成から受けた観点は存外根強く残ったのではあるまいか。

## ○『毎月抄』の用例

ここでは前項の定家の用例と一応区別して『毎月抄』の用例を扱うことにした。これは一つには、『毎月抄』は定家の作と見るのが通説であろうが、偽書説も完全に否定されてはいない点を考慮したためでもある。また一つには、『毎月抄』は前項でとり上げた和歌に即した批評とは異なる性質をもつ歌論であるところから、前項の場合と別に扱った方が、整理して見る上で便利かと思われるためでもある。

『毎月抄』の本文は『日本古典文学大系』(歌論集能楽論集)によったが、異体の漢字を通行の漢字に改めた点や、反復記号を用いない表記にした点など、内容にかかわらない範囲で表記を前項の用例の場合に合わせたところがある。以下、用例を『毎月抄』に見られる順序に四箇所抄出する。

(1) もとの姿と申すは、勘へ申し候ひし十体の中の幽玄様・事可然様・麗様・有心体、これらの四にて候べし。此体どもの中にも古めかしき歌どもはままだ見え候へども、それは古体ながらも苦しからぬ姿にて候。ただすなほにやさしき姿をまづ自在にあそばししたためて後は、長高様・見様・面白様・有一節様・濃様などやうの体は、



いとやさき事にて候。鬼拉の体ぞ(勝嘉堂文庫本等)鬼拉の体こそたやすくまなびおほせがたう候なる。それも練磨の後は、などかよまれ侍らざらん。

#### 【通釈】

基本的な歌の姿と申しますのは、私の考えました十体の中の幽玄様・事可然様・麗様・有心体、これらの四つの歌体が相当すると思います。これらの歌体に属する歌の中にも古めかしい歌は時々見られますけれども、それは古風な歌体であっても、習い取って差し支えない姿なのです。これらの素直で優美な歌の姿をまず自由に詠みこなすようになられたならば、長高様・見様・面白様・有一節様・濃様などの歌体は、きわめて容易に詠むことができます。ただ鬼拉の体だけは簡単に習得することの難しい歌体です。しかしこの鬼拉体も稽古を積んだ後には必ず詠むことができると思います。

【注】○幽玄様 世俗を離れた深さを特徴とする歌体。以下十体の各歌体については、小著『定家十体の研究』によって要点をできるだけ簡単に記しておく。○事可然様 歌の内容が理としてそうあるべき事と肯定されるような歌体。○麗様 表現が和歌としての格に合い整っている点に特徴の認められる歌体。○有心体 作者の思い入れの深さを特徴とする歌体。○長高様 格調の高さや大きさを特徴とする歌体。○見様 風物に関するイメージが眼前に髣髴と「見るやう」に感じられる点の特徴とする歌体。○面白様 歌の趣向が巧みで目新しく、興趣の感じられる点の特徴とする歌体。○有一節様 趣向上の見所が何か一つ目立つ歌体。○濃様 感情内容をきめ細かく表現した点の特徴とする歌体。○鬼拉の体 拉鬼体。力強い表現を特徴とする歌体。

【考察】この部分では、「幽玄」は、和歌の十体の一つ「幽玄様」「幽玄体」の本文もある）として挙げられている。ただ「幽玄様」自体の性質の説明はされておらず、事可然様・麗様・有心体とともに一括して、作歌を学ぶ段階の上でまず習得すべき「もとの姿」、そして「すなほにやさしき姿」として採り上げられている。

この場合「やさしき姿」は優美な姿と見てよいのであろうが、「す

なほにやさしき姿」は幽玄様・事可然様・麗様・有心体の四つの歌体に通じる性質として言われているので、「幽玄様」個々の性質と直ちに結びつけて見るのはいかがであらうか。前項で考えたように、定家の「幽玄」と評した歌は、いずれも世俗を離れて幽遠または幽寂な世界を志向するような性質があり、定家の認識する「幽玄」の歌の個々の性質はその点を無視して考えることはできないと思われる。これに対して、歌人がまず習得すべき「もとの姿」はどんな性質のものかという観点から言われたのが、「すなほにやさしき姿」であらう。その場合「もとの姿」の四歌体に通じる性質を「すなほにやさしき」とする根拠は、それなりに考えられると思う。すなわち「幽玄様」以下の四歌体は、定家の創始した新風の歌の場合などに比べると「すなほ」な姿と思われるし、また「鬼拉の体」(拉鬼体)などに対しては「やさしき姿」をもつと言えるであらう。

このような「もとの姿」四歌体の性質について言われた「すなほにやさしき」を、「幽玄様」個々の性質と直結して、「幽玄様」の本質を優美な歌体とする見方もあるようなので、両者の関係に触れてみた。「幽玄」観の変遷の上では後に「幽玄」が優美の色を濃くしてくるのは事実であるが、『毎月抄』のこの用例から直ちに「幽玄」を優美と解するのは適当でないと思う。

(2) さても此有心体は、余の九体にわたりて侍るべし。其故は幽玄にも心あるべし。長高にも又侍るべし。残りの体にも又かくのごとし。げにげにいづれの体にも、実は心なき歌はわるきにて候。今此十体の中に、有心体とていだし侍るは、余体の歌の心あるにては候はず。一向有心の体をのみさきとしてよめるばかりをえらび出して侍る也。いづれの体にても、ただ有心体を存すべきにて候。

#### 【通釈】

さて、この有心体は、有心体以外の九つの歌体にも共通して根底にあるべきものと思います。そう考える理由は、幽玄様の歌にも心



がある（思い入れがある）はです。長高様の歌にも心があるはです。その他の歌体の歌にしてもやはり同様です。実際のどの歌体でも、本当のところ心のない歌（思い入れのない歌）はよくない歌なのです。それで当面この十体の中に有心体として挙げましたのは、他の九つの歌体の歌で心のある場合（広義の有心体の歌）ではありません。もっぱら心のある歌体であることを重視して詠んだ場合だけを採り上げてみたのです。そういうわけですから、どの歌体の歌を詠むにしても、根本的にはただ有心体（広義の有心体）であることに留意すべきものと思います。

【注】○心ある 思い入れがある。思い入れが深い。「心あり」や「心ふかし」は、「思ひ入れたり」と近い関係で意識されたと思われる用例が、俊成や定家の判詞に見られ、後の用例になるが、『井蛙抄』では「心ある体」について説いて「思ひ入れたるを心あるとは申すなり」と記している。「心あり」と「心ふかし」との関係については、『毎月抄』や俊成・定家の判詞の用例によると、特に区別せずに用いた場合もある一方、区別したと見られる場合もあり、後者の場合は「心あり」と見られる状態の中でも特に思い入れの深さが認められる時に「心深し」としているようである。なお、詳細は小著『定家十体の研究』に記した。

【考察】この部分では、「有心体」が十体の他の歌体と並列の関係にある一方で、他の歌体のすべての基底に置かれるべきものとする見解を中心に述べている。そこで「幽玄」(この場合「幽玄様」を指すと見られる)については「幽玄にも心あるべし」と例示に用いた程度である。「幽玄」や「幽玄様」個々の性質については、ここでも触れられていない。ただ「幽玄様」の歌のあり方に関して、他の歌体の場合と同様に「心ある」態度を基底にもつべきことを指摘した意義は認められると思う。

(3) 又歌の大事は詞の用捨にて侍るべし。詞につきて、強弱大小候べ

し。それを能々見したためて、つよき詞をば一向にこれをつづけ、よわき詞をば又一向に是をつらね、かくの如く案じかへし案じかへし、ふとみほそみもなく、なびらかに聞きにくからぬやうによみながら、きはめて重事にて侍る也。申さばすべて詞にあしきもなくよろしきもあるべからず。ただつづけがらにて、歌詞の勝劣侍るべし。幽玄の詞に鬼拉の詞などをつらねたらむは、いとみぐるしからんにこそ。

#### 【通釈】

また歌を詠む上で重要なことは、詞の選び方の問題であろうと思います。詞にはそれぞれ強弱大小の性質があるかと思えます。その点を十分に見届けた上で、強い詞はそれだけ続けるようにし、弱い詞はまたそれだけ続けるようにする、そういう観点から幾度も考え直して、詞続きに太み細みのむらがなく、なだらかな詞運びで聞き苦しくないように表現するのが、きわめて重要なことなのです。言ってみれば、概して一つ一つの詞には悪い詞もなく良い詞もあるわけがないのです。ただ詞の続け具合によって、歌の詞の優劣が生じるのであらうと思います。幽玄の詞に鬼拉の詞などを続けてあったとしたら、はなはだ見苦しいことでしょう。

【注】○詞の用捨 詞の取捨選択。○詞につきて強弱大小候べし 詞には強弱大小があるでしょう。ただ詞の「大小」とは、どんなことを表した語であらうか。「強弱」の後に添えて「強弱」を強調した表現とも受けとれる。あるいは後の「ふとみほそみ」に対応するとも見られる。○ふとみほそみもなく 詞の続け方に太み細みのむらがなく。「ふとみほそみ」は、おおらかな感じの所と繊細な感じの所とを指すか。歌体の「ふとし」「ほそし」については、三体和歌に関する『無名抄』の記事に「春・夏はふとく大きに、秋・冬はほそくからび」とあり、『明月記』でこれに対応する部分に「大ニフトキ歌」(春夏)「からびやせすじき」(秋冬)とあることなどが、一つの参考になる。

【考察】この部分では、詞には「つよき詞」と「よわき詞」があり、



歌の詞の続け方としてはその一方のみで一貫すべきことを説き、例として「幽玄の詞」に「鬼拉の詞」などを続けるのは見苦しいと述べている。「幽玄」個有の性質には特に言及していないが、「鬼拉の詞」が「つよき詞」に属するのに対して、「幽玄の詞」は「よわき詞」に属するものとされているように読みとられる。ただし「つよき」と「よわき」は相対的な関係であり、「よわき詞」の性質をさらに具体的に知ることはできない。

「幽玄の詞」は、定家の判詞の用例としては、『千五百番歌合』七百五十一番に見られる。そこでは俊成の右歌、

月はこれあはれを人につくさせてにしへつひにはさそふなりけり  
について、「幽玄之詞、雖<sub>レ</sub>頗異<sub>レ</sub>他」と評している。この用例は先に考察したが、それに特に加えるべきことを『毎月抄』の「幽玄の詞」の用例から引き出すのは難しいと思う。

(4) さきにしるし申し候ひし十体をば、人の趣を見てさづくべきにて候。器量も器ならぬも、うけたる其体侍るべし。或は幽玄の体をうけたらん人に、鬼拉の様をよめとをしへ、又長高様を得たる輩に濃体をよめとをしへん事は、何かよかるべき。

#### 【通釈】

先に記しました十体は、歌の詠み方を習う人の素質の有り様を見て、それに合った歌体を教えるべきものです。才能のある人も才能のない人も、生来その身に合った歌体があると思われまします。ですから、幽玄の体の身に合った人に鬼拉様を詠めと教えたり、長高様を得意とする人々に濃体を詠めと教えたりするようなことは、よいわけがないと思うのです。

【注】○人の趣 ここでは作歌を習う人の素質上の傾向を言う。○うけたる其体 天から授かった素質に合った歌体。

【考察】この部分では、十体に関して、歌を習う人の素質に合った歌体を教える必要性を言い、例として「幽玄の体」の合った人に「鬼拉

の様」を詠ませる類のことはよくないと述べている。ここでも「幽玄」の個有の性質には触れていないが、「幽玄の体」と「鬼拉の様」とを異質の歌体として採り上げている点は、前の用例で「幽玄の詞」と「鬼拉の詞」を対立的な性質の詞として採り上げていたのと同様である。こういうことから見ると、「幽玄」と「鬼拉」とは表現上対立的な性質のものととして筆者に考えられていたように思われる。そして「鬼拉」が「つよき」ことにかかわる特徴を表すとすると、「幽玄」はそれに対して「よわき」ことにかかわる特徴を表すと見られそうである。しかし前の用例の考察で触れたように、「よわき」は「つよき」に対して相対的に言われることで、ここから「幽玄」の特徴を具体的に知ることはできない。それは優美とも、幽寂とも、またその他の特徴とも、『毎月抄』の文章だけから決めることはできない。定家の「幽玄」のより具体的な特徴については、やはり歌に即した定家の批評に用いられた「幽玄」を手掛かりに考える外はないようである。

以上、『毎月抄』の「幽玄」の用例を四箇所の部分について見てきたが、ここでは「幽玄様」または「幽玄の体」という歌体として採り上げている場合が三例、また「幽玄の詞」として挙げている場合が一例見られた。「幽玄の体」の用例は俊成にもあったが、このように和歌の十体の一つとされ、また十体の内でも「もとの姿」の四体の第一に挙げられているのは、「幽玄」が歌体の特長として重視され、理念化されてきたことを示しているのであろう。ただ「幽玄」がどのような特長なのかという点は、『毎月抄』の用例だけによって十分に明らかにすることは難しいようである。